

思いきったように彼が尋ねた。「あなたは、仲間の知り合いなのかね？」

一般のシシリー人にとって、マフィアという言葉は大つばらに口にできるものではなく、したがってカフェの主人が、マイケルはマフィアの一員なのかと尋ねるには、それが精一杯のところなのだった。

——マリオ・プーゾ『ゴッドファーザー』（二ノ瀬直二訳）

たいした思い出はないし、みな映画の中で語ってしまった。

観客の目にさらすことで、思い出は忘れてしまったし、今では本当に起きたことと、作り出したことの区別さえつかない。

——フェデリコ・フェリーニ、ジョヴァンニ・ドラッツィー

二『フェリーニ、映画を語る』（竹山博英訳）

髪をひとつに結った鼻の大きなイタリア人風の女が、カフェ・バルのカウンターで朝のカップチーノを飲んでいる。店内には五、六人の客がやはりコーヒーを飲み軽食を取っている。女は憂鬱そうな目をして、片手で手慰みのようにコインを弄んでいる。その女の後ろへ、コップラ帽を被った男が近付く。男は銃を、ベレッタ

M1951をコートの下から抜き、おもむろにしかし速やかにコッキング、女の背中に銃口を向けて、三発の弾を撃ち込んだ。女は衝撃に目を見開き、カップを取り落としてカウンターにしがみつき、そ

のままずると崩れ落ちる。女の手から転げ出たコインが床の上を踊る。殺し屋は倒れた女に更に三発撃ち込むと、店を立ち去る。他の客も店員も緊張と恐怖が生む硬い表情を張りつけ、しかしいっさいなにも見なかったという顔をしている。コインは勢いを弱めながらも未だカラカラと転がっている。

それは一九八三年スペイン・ニハル。国の最南に近いある村の傍で、マリーア・バルディは車を降りた。乾いた風に赤毛のショートヘアが煽られ、自然と細くなる目で周囲を見回す。荒野と言ってよいその場所にある村はそれ自体も寂れている。人の気配はないに等しい。マリーアは緊張と恐怖を含んだ、しかしどこか諦めから生まれるぞんざいさを持った視線を周囲に向けながら、薄灰色の道を踏み締め、村の中へ進んだ。彼女はイタリア人で——正確にはシシリー人で、故郷に居場所を失い、逃亡という名の放浪を繰り返していた。白く四角い住居がいくつもあったが、そのうちの三分の一は崩れ、もう三分の一は明らかな空き家で、残りはどちらともつかない。小さな村で、すぐに低い山か丘かといった土地の隆起に行き止まりを示される。その麓、木に埋もれるようにひっそりと家が一軒、他から少し離れて建つ。マリーアは足を止め、相変わずひとけのない辺りの様子を窺って考えた挙げ句、来た道を戻ろうとした。

「誰？」

虚ろな声に、マリーアは方向転換を止める。白い家の戸口に女が立っていた。胸の広くあいた暗い赤のワンピースを着、陰鬱な長い黒髪をした瘦身の女だった。顔には警戒の色が強く滲んでいるが、その目はマリーアをきちんと見据えていないようにも見えた。マリーアは億劫げに微かに眉を寄せ、指の背で眉間を擦ってその皺を伸ば